

家庭科に出会い、学び合いの中で生活に主体的に関わろうとし、実践していく子ども

— 小学5年「わたしにもできる！家族の仕事を見つけよう」の実践から —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

5年生に進級し、高学年の仲間入りをした子どもたち。学校生活において、学校行事や委員会活動など高学年としての新たな活動も加わり、意欲に満ちあふれている。そして、5年生から新たに始まる教科が家庭科である。始業式の日『5年生になって』というテーマで書いた児童Aの作文である。

5年生ではいろいろなことが新しくふえます。一つは委員会です。ぼくは体育がすきなので、体育委員会に入りたいです。二つ目は家庭科です。家庭科では料理をしたり、おさいほうをしたりいろいろします。ぼくの楽しみなことは料理です。

このように、5年生になったらいろいろなことがあります。ぼくは、すごく楽しみです。(児童A)

子どもたちは、小学5年から始まる家庭科の学習に興味関心が高い。児童Aのように、特に調理実習や被服製作を中心に家庭科の学習を楽しみにしている子どもは多い。

次に示すのは、初めての家庭科の授業で、家庭科についてのガイダンスをした後のふりかえりである。

今日は初の家庭科をしました。なんか今までの家庭科のイメージとはぜんぜんちがってびっくりしました。でも、自分の生活に活かしたいです。(児童B)

家庭科の授業では料理やさいほうをするだけかと思っていたけど、こんなに深いところまで勉強するんだなあと思いました。(児童C)

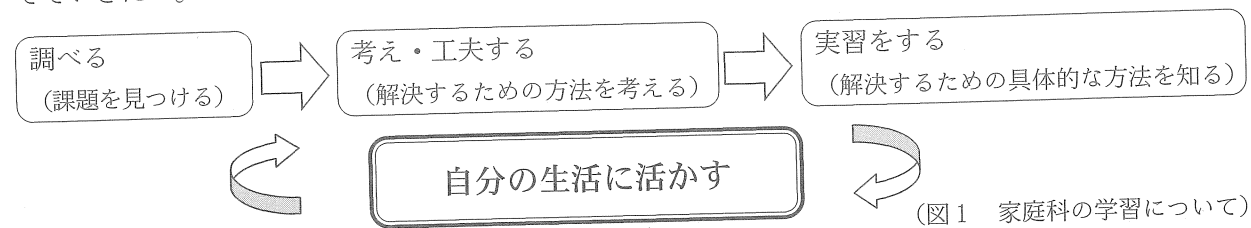
家庭科の学習は、調理実習や被服製作のイメージが強く、それだけが独り歩きしがちである。しかし、調理実習や被服製作の活動で得られる知識や技能は、家庭科のねらう日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能の一つにすぎず、生活をよりよくするための手段の一つである。子どもたちの中にある家庭科に対する限られたイメージを広げ、自らの生活をとらえながらそこから課題を見出し、解決する過程で得た知識や技能を自分の生活に活かすということに気づかせたい。

これまで子どもたちは、日常生活を送る中で様々な生活経験を積んできている。しかし、個々によって生活経験に差があり、すでに自分一人で何か料理を作れる子どももいれば、包丁を握ったことがない子どももいる。とはいえ、経験の差に関わらず、全ての子どもにできるのは、これまでの経験は、自分が好きな時に、好きなようにやるものであったり、家の人から言われてやったりと、生活に主体的に関わろうという意識や、生活を作る一員であるという自覚はほとんどもてていない。よって、本題材で、家庭科に出会うことで日常生活やその生活を成り立たせている要素を意識し、主体的に関わろうとする態度や意欲をもたせ、生活への実践につなげていかせたいと考える。さらに、自らの成長をふり返ることで、心身の成長と共に、生活の中で自分ができるようになったことを再認識させる。そしてその成長には、家族をはじめ、多くの人やもの、環境が関わり合いながら、今の自分がいることにも気づくようにしたい。また、家庭生活をふり返ることで、1日の生活を送るためには、自分も含め、家族が色々な仕事をしながら家庭生活をつくっていることにも気づけるようにする。家庭生活と家族の大切さに気づき、生活を送るために“人・もの・環境”が相互に関係し合っているということに気づかせる。そして生活をよりよくするために、家族の一員として自らも主体的に関わろうとする意欲や態度をもたせ、家庭での実践につなげていきたい。

(2) 本題材の目標や内容と技術・家庭科で考える思考力・判断力・表現力の育成と関わりについて

本題材では、自分の成長や生活をふり返りながら、家庭生活を支える家族の仕事があることを理解し、

自らが行う仕事計画を立て、家族の仕事を実践し、生活に主体的に関わろうとする意欲や態度を育てることをねらいとしている。自分の生活をふり返る中で、家族を支える仕事がたくさんあることに気づき、その仕事は誰がやっているのだろうかという疑問が見えてくるであろう。その疑問を解決するために、各家庭で誰が、どのような仕事をしているか調べることで、それらの仕事は自分以外の家族、とりわけ母親が中心となって行っていることに気づく。そこで、自分の成長をふり返る中で、これまで成長してきた様々なことができるようになった今の自分やもっとこうなりたい、という自分と照らし合わせながら、自分にも家庭生活を支える家族の仕事に関わることがもっとできないだろうかという課題が見える。個々がそれぞれの家庭の実態に応じた課題をもち、生活をよりよくしようと工夫しながら計画を立てていく。このように課題を見出し、解決していく中で、思考力・判断力・表現力が育成されていくものであると考える。初めて家庭科と出会う本題材で、家庭科として思考、判断し、表現することの素地を育てていきたい。



(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

技術・家庭科における思考力・判断力・表現力の11年間のつながりの中で、小学5年に当たる初等部後期では、『生活に主体的に関わろうとする意欲や態度の中から、自らが生活を作る一員としての自覚をもち、生活をよりよくしていこうと工夫する力』の育成を目指している。本題材では、これを受け、自分の成長や生活をふり返りながら、家庭生活を支える家族の仕事があることを理解し、「わたしにもできる！家族の仕事計画」を通して、家族の仕事を実践し、生活に主体的に関わろうとする意欲や態度を育てていきたいと考える。

第1次では、自分の成長や日常生活をふり返る。そして、家庭科の学習についてのガイダンスとして、小学校家庭科学習の2年間の見通しをもたせていく。日常生活をふり返り、どのような生活を送りたいか考えていく中で、ものに恵まれ、安心して過ごせる生活を送りたいと願うであろう。そのためには、何が必要か考え、学び合うことを通して、家庭科で学習する要素を見つけ出していく。さらに、家庭科の学習について上記の図1を示すことで、家庭科の学習は、調理や裁縫が中心であるというイメージを転換させ、生活の中から課題を見出し、解決していくことが家庭科であることに気づくようにしたい。

第2次では、第1次を受けて、1日の生活をふり返る。そのふりかえりの中で、1日の生活を送るためには、自分も含め、家族が家庭生活を支えるために様々な働きをしていることに気づく。そして、家族がどのような仕事をしているか調べる中で、各家庭での課題を見つけ、生活をよりよくしていくために自分ももっと主体的に家族の仕事に関われないか考え、実施計画を立てる。各家庭で課題は様々であると考えられるため、学級の実態をふまえたモデル家族を示し、学級全体でモデル家族を通して課題解決に向けた学び合いの場を設ける。まず、班ごとにモデル家族における「わたしにもできる！家族の仕事計画」を話し合う。そして、計画表にまとめ、学級全体で意見を交換し、自らが計画を立てるために、考えを深めていったり、計画を立てるための具体的な方法を見出したりする場としていきたい。このモデル家族での計画が、自分の計画に活かされるよう、個々で家族の仕事表を作成し、実態を把握できるようにする。自分が主体的に関われる仕事はないか、家族の中で極端に仕事をしている割合が多い者がいるのであれば、その負担を軽減するために自分ができる仕事はないかななどの視点で、自らの生活の実態に応じた計画が立てられるようにしたい。

第3次では、家族の仕事の具体の一つとして、子どもたちの一番の興味関心があるといっている調理の基礎であるガスコンロの使い方を学ぶ。自分ももっと家族の仕事に主体的に関われないだろうかということやこれまでの学び合いによって個々が見出す中で、やってみたいという強い思いがあるものの、

実践するための知識や技能が備わっていないことが見えてくるであろう。そこで、子どもたちの家庭生活を支える家族の仕事の中の調理の仕事に関わりたい、という思いを実践することにつながる場とした。ガスコンロの使い方の学習の中で、沸かしたお湯でお茶を入れる。お茶は家庭生活の中でも頻りに飲まれるもので、日常生活の食事や団らんの場面など活用することができる。また、お茶受けとして、白玉団子を作る。粉と水を混ぜるだけの手軽さ、また、今後のゆでる学習に活かしていきたいと考えたからである。

そして、家族の仕事計画の実践の場を夏休みに設定した。時間にゆとりがある長期休暇を利用して、計画した仕事を通して、生活に主体的に関わろうとする意欲や態度、実践力を身につけることができるであろう。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容 (◇印は、学級全体の学び合いの場面)
1	自分の成長や生活をふり返る ・家庭科の学習にあたってのガイダンス ・自分の成長や生活をふり返る	1	・自分の成長や生活をふり返りながら2年間の小学校家庭科の学習の見通しをもつ。 ◇安心して生活するためには何が必要か日常生活をふり返りながら見出すことができている。
		2	
2	どのように生活しているかな ・1日の生活をふり返る ・家庭を支える仕事には何があるか考える 家族と協力して生活しよう ・〇〇家の家庭の仕事表を作る ・わたしにもできる！家庭の仕事計画を立てる	3	・自分の1日の生活を振り返りながら、家庭を支えるには何があるかまず個別に考え、さらに学級全体で意見を交流させながら見つけ出す。 ・前時で見つけ出した家庭の仕事を、それぞれの家庭で誰が主にしているか表にまとめ、個々で自分の実態を把握する。 ◇個々で作った表をもとに、モデル家族の仕事表を提示し、モデル家族での家庭の仕事の実態と課題、仕事の実践方法を学級全体で話し合う。それを受けて、個々が自分の生活をよりよくしていこうとそれぞれの家庭における自分の仕事計画を見出すことができている。
		4	
		5	
		6	
3	自分ができる仕事を増やそう ・ガスコンロを使ってお湯をわかし、お茶を入れる	8	・安全に気をつけながら、ガスコンロを正しく使い、お湯を沸かしてお茶を入れたり、白玉団子を作ったりする。
		9	
課外	家庭の仕事計画を実践しよう	夏休み	・計画を立てた仕事計画を実践し、実践の様子を記録、家族の人からのコメントをいただく。

3 授業の実際

(1) 自分の生活をふり返る

今日は、初めて5年生での家庭科をしました。それで、生活のことを考えました。そうしたらいろんなものが必要だと思いました。これからも大切にしたいです。(児童D)

あまり「どんなふうに生活したいか」とか考えたことがなかったから、家庭科で考えられてよかったです。(児童E)

自分の成長や生活を振り返ることを通して得た児童D、児童Eのふりかえりである。生活を改めて見詰め直すことで、生活を送るためには、これまで自分があまり意識していなかったこと、見えていなかったことがたくさんあったと気づいた瞬間である。

自分の成長や生活を振り返ることで、改めて生活を意識することをねらいとし、どんな生活を送りたいか、そのためには何が必要か、全体で考えを出し合った。その中で子どもたちは、家族みんなが健康で、みんなが仲良く、楽しい生活を送りたいと願っている。そして、そのためには、食べ物や生活用品などのもの、友だちや家族、公園や学校などが具体的に必要であると考えた。この学び合いを通して、食べること、着ることだけでなく、豊かな生活を送るためには、多くの人やもの、それを取り巻く環境が必要であり、これらが深くかかわり合いながら、生活が営まれていることを再認識できた。この生活を再認識する過程こそ家庭科学習の第一歩であり、子どもたちの家庭科の学びが調理や裁縫だけでなく、もっと幅広いということ、そして、生活に活かしていくということが理解された。そして、個々の生活へ焦点化していく第2次の足掛かりとして、今後の学習の見通しや、意欲につながっていったのではと考える。

(2) 『私にもできる！家庭の仕事計画を立てよう』～モデル家族による学び合い～

実際の自分の1日の生活に焦点を絞り、その中で自分をふくむ家族が、家庭生活を営むためにどのような仕事をしているか考えた。まずは、個々で考え、学級全体で考えを出し合った。すると、40近くもの仕事が見つかった。食事作りや洗濯はもとより、きょうだいの面倒を見ることや、ペットのお世話、害虫の駆除といった仕事も出た。子どもたちは、1日の生活を送るためには、こんなにも仕事があるのかと大変驚いていた。この驚きから、これらの仕事は、いったい誰がやっているのかという疑問を抱く。そこで、家族の中の誰が、どのような仕事をしているか整理するためのはたらきかけとして、子どもたちが見出した仕事を、各家庭で、日常的に行われている仕事に絞り込み、衣・食・住・その他で仕事内容を分け、以下のように提示した。

衣	食	住	その他
洗濯	食器を用意する	ふとんをしく	買い物をする
干す	調理をする	ふとんをたたむ	ペットのお世話
取り込む	食器を下げる	風呂そうじ	家族のお世話
アイロンをかける	食器を洗う	風呂に水を入れる	水やり
たたむ	食器をしまう	風呂をわかす	習い事の送り迎え
しまう		家のそうじ	修理
補修		玄関そうじ	
		くつをならべる	
		庭・畑の手入れ	
		ごみを出す	
		ごみの分別	
		トイレそうじ	

そして、上記の仕事から、子どもたちそれぞれの家庭では誰が、どの仕事をしているかを表にまとめていった。さらに、そこから学級全体で家族の仕事の様子や、そこから課題を見出し、解決する方法を探るために、誰が、どの仕事をしているかということ学級の子どもの家庭の傾向をみながら、モデル家族を作り、次頁の表をもとに学び合う場面を設定した。

モデル家族を用いることで、自分の家族の様子を出して話し合うことに抵抗を感じる子どもにとっても、班や学級全体で共通した話し合いができること、学び合うことで個々の考えも深まり、自分の計画を立てる際にもその考え方や計画の立て方を活かすことができると考えた。

衣	食	住	他	果	菜	果	菜
	補修						
	しまう						
	アイロン		しまう		庭・畑	くつならべ	わかす
	たたむ		洗う		わかす	ごみ分別	げんかん
	取り込む		下げる		水入れ	ごみ出し	家そうじ
	しまう	干す	しまう	下げる	下げる	調理	洗う
しまう	洗濯	洗濯	アイロン	用意	調理	用意	下げる
私	父	母	姉	私	父	母	姉

(モデル家族の家庭での仕事の様子)

実際にモデル家族の仕事表を示した時の子どもたちの反応は、「自分の家もこんな様子だなあ」と感じる子どもが多く、自分の家族を思い浮かべながら、モデル家族をもとに考えることができた。

その中で、この表から子どもたちが気づいたことは以下のものである。

- ・お母さんがたくさん仕事をしている。
- ・内容によって、やっている人に違いがある。
(住の分野ではみんなできているが、衣の分野ではお母さんが中心である)
- ・お母さんやお父さんが難しい仕事をして、姉や私は簡単な仕事をしている。
- ・私がしていることが少なく、簡単なものである。
- ・私にもできそうな仕事がある。

モデル家族の仕事表から、気づいたことをふまえ、お母さんを中心に仕事量に偏りがあり、家族の仕事をもっとみんなで支えなければいけないのではないかと、私にもできる仕事があるのではないかと、という課題が見出された。それを受け、班ごとに『私にもできる仕事計画』を立てた結果が下に示したものである。自分の生活と照らし合わせながら、実際の生活の中でも確実にできる仕事を選び、理由を考えている。短時間でできることや、今の自分にもできること、さらには、他の家族のことを意識した計画を立てていることが分かる。このモデル家族での学び合いから、課題を見出し、自分の生活と照らし合わせながら計画を立てていく視点や、そのなかで仕事内容や相手意識をもって考える視点など深めることできたのではないかと考える。そして、自分の家族の仕事表に戻り、家族の仕事計画を立てた児童Fの記述である。

仕事…くつならべ
理由…忙しくても短時間で終るから

仕事…洗濯物
理由…母が時間がないときに困っているから

服をたたむことは自分にもできると思いました。そして、服のほ修は、これから家庭科でさいほうを習うから、あるていどのことならやってみたいです。(児童F)

今の自分にできること、これからの家庭科での学びを通して、できるようになったことを家庭生活で活かしていきたいという願いも含まれ、学び合いを通して、個々の思考が深まったと考える。

(3) 自分ができる仕事を増やそう

家庭の仕事計画を作る中で、児童Fのように家庭科の学習を活かしたいと考える子どもも多い。その中で、調理は子どもたちが一番関わってみたいと考えている家族の仕事である。そこで、調理の基礎として、お湯を沸かし、お茶と白玉団子を作る学習を行った。

実習の前後で実際に家で作ってみたという子どももたくさんいることから、学んだことを日常生活に活かすということを実感することができる学習であったと考える。また、生活経験の異なる子どもたちが、それぞれの経験を活かしながら、調理の仕方や器具の準備について話し合ったり、助け合ったり協力しながら一つのものを作るという学び合いの場としてもとても有意義であったと考える。

4 成果と課題

(1) 成果

モデル家族を通して家庭の仕事計画を考え、学び合うことに対しては、前述のように抵抗なくすることができた。家族の学習については、全体場で共有することに抵抗をもつ子どもも少なくないが、モデル家族を通すことで、客観的に考え、自分の考えをもち、学び合うのに有効な手立てであった。モデルではあるが、一つの家族について学び合うことで、家庭のどんな仕事にどのように関わればいいのか考えを深めることができた。そして、自分の家庭について考える際の手立てとなり、全員がそれぞれの家庭の実態や自分の現状に応じた計画を立てることができた。

その計画を実践する場として、夏休みを設定した。夏休みは家庭での生活が中心となり、家庭での主体的な関わりが持てる絶好の機会である。これまでも子どもたちは、生活面のめあてや課題をもち夏休みを過ごしてきた。夏休みの計画表などに『お手伝い』などという項目を設ける学年も多い。しかし、1学期間ではあるが、家庭科の学習をしてきた子どもたちには、あえて、『仕事』と示した。夏休みの計画を立てる際に、今までの『お手伝い』と『仕事』の違いに気づいた児童たちの会話である。

T	夏休みの“家庭での仕事”を考えましょう。
児童G	買い物にしようかなぁ～。
児童H	それって手伝いじゃん。
児童G	えっ!?
児童H	<u>仕事だから家の人に言われるんじゃないくて、自分でしないといけないんじゃないの？</u>
全員	なるほど!

子どもたちが主体的に家庭と関わろうとする態度や意識が身についてきていることがとらえられた瞬間である。児童Hの『家の人から言われるんじゃないくて、自分でしないと・・・』という発言はまさに家庭科がねらいとしている家族の一員として生活をよりよくしようとする態度である。本実践で学んだ家庭生活や家族の仕事に対する見方や考え方が深まりつつある。

そして、夏休み明け、子どもたちが実践した家庭の仕事についての保護者の感想である。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・家庭の仕事は夕方に庭の水やりやってもらって助かりました。・お手伝い、お願いすると必ずやってくれてとても助かりました。 |
|--|

子どもたちは、これまでの学習や生活経験を活かしながら、それぞれの家庭で自分のできることを見出し、実践していった。しかし、子どもたちの“仕事”意識とは異なり、家族の人にとってみれば、“お手伝い”であったようだ。まだまだ、主体的な関わりをするためには、更なる学習経験が必要であるが、このように子どもたちが家庭科の学習を通して学んだことを家庭へ持ち帰り、実践したことに対して家族の方からコメントをいただくという取り組みを重ねることで、子どもたちの家庭生活に対する意識を高め、各家庭にも子どもたちの主体的な関わりを認めていただきながら、主体的に関わろうとする意欲や態度、実践力を育てていきたい。

(2) 課題

モデル家族を通して私にもできる家族の仕事を考える際に、授業の実際で示したB班のような「簡単にできる」「時間がなくてもできる」といった考え方が多くを占めてしまった。現実的で、それぞれの実態に応じた計画を立てることができたとも考えられるが、そこには、「自分はこうしたい」とか、「こうなりたい」といった子どもたちの願いを反映させることが不十分であった。家庭科に初めて出会う本題材では、子どもの願いをもっと引き出し、大切に育んでいくことが重要であると考え。それが、今後の学習の意欲の源になる。モデル家族の活用や題材構成も含めて、今後更に検討する必要がある、思考力・判断力・表現力の育成ともからめてよりよい学び合いの場を設定していきたい。

(文責 竹吉 昭人)